

## 保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人和順福祉会
施設名	無二保育園
報告者（役職）	小宮山 武人（園長）
住所・連絡先	東京都葛飾区細田 3-16-5
	☎ 03-6458-0748
	E-mail munihoikuen@nifty.com

### ○タイトル（保育計画）

お部屋でもしっかり運動遊び 子どもの遊びから使い方が変わる

### ○主な助成備品

巧技台

## 1. 保育計画策定の目的

今回の第一生命財団様の助成金に応募し採用していただいたことについては、感謝の言葉しかありません。常より子どもたちの成長にとって運動はとても重要だと考えておりましたが、応募時期はコロナ禍の真ただ中で様々な行動制限があり、園児職員共々非常につらい時期でした。しかし購入させていただいた巧技台により室内において各年齢に適した運動遊びが可能となり、まさに存分に活用させていただきました。

年齢によって活動形態と運動量に大きな違いがあるなかで、種々のパーツで構成されている巧技台は、同じパーツでも発達に応じた異なる動きに合わせて使用することができました。一人ひとりの発達を丁寧に見守る保育を実施している当園では、日々の環境構成を何よりも重視しております。発達してほしい体の部位や発達のスピードに合わせて構成を変えられるパーツの多さは、室内での運動を活発にしてくれました。各年齢で実践した内容を報告させていただきます。

## 2. 具体的な実施内容

年齢の特徴と運動能力に合わせた使い方を各年齢ごとにまとめましたので、ご報告いたします。

### 「0歳児」

0歳児は月齢の差により運動量の違いが見られますが、全身運動の基礎となる「はいはい」が十分に行える環境作りに活用しました。高さの違う台を組み合わせてゆき、徐々に高さを

変えての利用です。初めは段差が一番低いものを二段までにして、平面での移動時で障害として意識できる高さにしました。通常の遊びで意識して台に上るといふ動きはなく、ごく自然に乗り上げては下るものですが、下りの際はしっかりと手のひらを広げ両手で体を支えていく姿が見られます。慣れてきたところでもう一段高さを増やし、山を乗り越える感じのものにしてからはのぼりにも意識をしてしっかりと手に力を入れ踏ん張るようになりました。下りになると高さゆえにためらう姿はあるものの、まっすぐ上って降りるのではなく一番高い位置から側面に足を下ろして、お尻から降りることに挑戦する姿は保育士が教えていない行為であり、自身で試みた動きであるのが見られました。0歳ながらも降り方には直線だけではなく、身体を回転して自分が安心して降りられる手法を身につけた瞬間でもありました。月齢の高いお子さんはさらに高く積み上げた台でまさしくゆっくり慎重に足から降りることも学び、スリルから更に臨機応変に安全に降りられる安心感を身につけていました。



### 「1歳児」

1歳児になると動きはより激しくなりますが、そこで安全に遊べる活用を子どもたちが身につけていきました。台をつなげての歩行遊びを行い、一本橋での不安定さではなく広い面での移動を楽しんでいます。低い段からの飛び降りるを身につけ高い位置を歩くことを楽しんでおり、複雑な組み合わせよりは大きな障害物という意識と飛び降りる動きを身につけた姿が見られました。この時に注意していたのが双方から渡るのではなく、一方通行で安全に渡る意識を知らせることです。幅が広く歩けるのですが、そこからしっかりと秩序とルールを知らせてケガを未然に防ぐ運動活動が展開できました。



### 「2歳児」

2歳児では、難しいことよりもまず自分でやってみようとする気持ちを大切にすることを重視しました。室内には平均台利用として2本の柱を並べ、1本ではなく2本を跨いででも前に進むことを意識しました。見本を見せないと1本だけで渡ろうとしますが、2本跨いで歩くことのバランスの取り方を知らせると、自然と身体を左右に揺らしながら自らその感覚を身につけていきました。慣れてきたところで片方の台を上げ坂道にするとグッと難易度

が上がり、ただ歩いていただけではなく左右の動きから前後で踏ん張る動きも加わり慎重になっていきます。

足の裏の平面を使うから足の指の踏ん張りが加わり、四つん這いで手足の動きのバランス間隔を身につけ、室内での運動で体感の使い方を身につけていきました。



### 「3歳児以上児」

3歳児になると身体のバランスと手足の使い方もしっかりとしてくることから、3歳の動きを中心にとは考えずに幼児クラス全体での運動用具として様々な動きができる組み合わせを行いました。梯子を斜めに掛けて上り、手で握りしめ、足の指と裏をしっかりと使う組み合わせから始めました。登り切ったところでのジャンプをする子、ジャンプでは怖さを感じている子（特に3歳児）には足から降りる方法を伝え、自分でできる降り方を知ることでも学びます。梯子の段差も慣れてくると更に角度をつけての挑戦です。初めは慎重に行っているものの怖さに慣れてくると一段一段登るところから両手足を使って交互に登るようになります。平均台では2本の幅を広げ、1本でも2本でも渡れるように設置し、慣れてきた時には一本橋の平面ではなく丸みの方を上向きして少しバランスをとることの難易度を上げるなど、日々変化を加えて楽しんでいるようになっていきました。運動だけに特化していない巧技台の良いところは滑り台としても遊びきれることです。滑りを緩やかにして通常の滑り台で楽しむことと、角度を付けて滑り降りるスリルを楽しみ、さらに逆から急斜面を上るといった運動遊びも楽しみました。



各年齢で使い方の工夫や広がりができ、子どもも成長と共に保育者が予知しない使い方をする楽しさがありました。この多彩な変化する運動遊びを展開できる巧技台を常設しておけることは無二保育園では大変ありがたいものでした。今でも遊びが単調になってくると、その際保育者がちょっとしたセッティングの工夫で遊びが変わることを常に意識していく必要はあります。その遊びの広がりは無限であるので、いつもの遊びが同じものでも一工夫で新しいワクワク感を生み出すように心がけています。

この運動の成果から散歩に出かけた時の公園での遊びにも変化が見られ、いつも保育園で行っている巧技台の遊びから公園のちょっとした設備で運動遊びを始めて楽しんだりして、園外でも運動遊びの広がりが見られるようになってきています。子どもは何でも遊びにしてしまう天才ですから、様々な経験から遊ぶものに変えてしまう発想は大切に伸ばし

ていきたいものです。



### 3. その成果と評価

運動遊びが活発になったことで、幼児クラスでは運動広場的に巧技台だけではなく鉄棒や大型積み木台・トランポリンも設置し、より複合的に子どもたちの成長を把握し巧技台の組み合わせや使い方を考えていきたいです。子どもの遊びの可能性を広げるために保育の環境をいかに作り上げるかと子どもたちが興味を持ち遊び込みたい気持ちにさせるかは保育者の腕の見せ所です。子どものワクワク感、子どものドキドキ感をしっかりと上げられる保育を今後も展開していきたいです。広い園庭がなくとも、子どもたちの運動機能を高める楽しい遊びを可能にする巧技台は保育園で毎日大活躍しています。



### 4. 今後の課題と展望

子どもの体の成長と運動の大切さをもっと家庭と共有してゆくことです。そのために保育参観や保育説明会で保護者にも実際の活動を見てもらい、家族でも楽しく運動することそして結果として生活リズムが整うことを園の保育士・看護師が協働で発信してゆくことがさらに必要であると感じております。

以上